

# 百合援助

端っこの柴犬

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

人と希種と呼ばれる存在が共存する世界。

希種は人以上の能力を持ち社会的上位者であるのが常識であったが、その能力を十全に振るうには人のサポートが必要であった。希種は人と体を触れ合わせることで”絆”と呼ばれるものを体の中に生み出すことができ、それが希種の高い能力の秘密であった。だが、ただ触れ合うだけでは絆は得られない。人と希種がその身を預けることが出来るほどに信頼し合っていなければいけないのだ。

※本作は一話完結ものです。更新頻度はかなり遅いです。

# 目次

捨て子幼女×羊OL	1
不良少女×竜社長	12
(捨て子幼女+不良少女)+女店長×鹿店員	25



# 捨て子幼女×羊OL

夏の雨はしとしと肌を濡らしていく。それはたとえ傘をさしていても、まるで雨が空気に溶けてしまったかのように、粘り着く。

「……少し、遅くなったわね」

そう小さく口にするのは、キツチリとしたスーツを身に纏い、一般男性よりも高い身長的女性。体軀だけでなく彼女の整った顔立ちは見るものを男女関係なく振り向かせるだけの魅力的なものであった。

独立した大人の女性、そんな雰囲気をも十二分に放つ彼女は薄暗くなった帰り道を足早に急いでいた。

歌守・ススーリ・ニウミーニヤ。それが彼女の名前だ。

数十年前より現れた希種と呼ばれる種族はその有能さによつて瞬く間に現代日本に溶け込んでいった。

一般人の数倍の筋力、知力を誇り、あらゆる能力が只の人とは比べ物にならないほど高く、故に現代では社会的に重要なポジションには必ずと言っていいほど希種がついてくる。

希種の有能さは社会のあらゆる場所に浸透し、有名な大企業の幹部はおろか、社長にまで上り詰めるものも少なくなく、肉体を用いるスポーツや頭脳を用いる室内競技でも希種の選手は必要不可欠な存在となっていた。

ススーリはそんな希種の中でもさらに有能な存在として大企業の社員として働いていた。

希種の中には己の能力の高さと、一般人の能力の低さから努力などバカバカしいと鼻で笑うものもいるが、彼女はそんな希種の中で決して希種以外の人間を下に見ることはない。希種でありながら決して努力を怠らず、慢心せず、だからこそ今の地位にいた。口に出さなくとも人を下等だと考えている希種は多く、たとえ人にやさしくする希種がいたとしてもそれは人を希種より劣ったかわいそうな存在だと上から目線で同情しているにすぎず、決して人を希種の”パートナー”とは考えてはいない。

それは希種の高い能力が、人との関わりによって得られる有限の能力であることを知っていても、変わることは無かった。

「あら……あれは？」

ススーリは薄暗い道の端に何やら黒い何かを見つけた。暗く、雨も降っているためその正体は伺い知れない。興味を持ったススーリはゆっくりとその何かに近づくが、そのなにかは彼女が近づいた瞬間小さくびくりと震えたのだ。その様子を見たススーリは

目を見開き、さしていた傘を放り投げてその何かに急いで近づきその“顔”を確認した。

「！……大変」

その黒いなかには幼い少女だった。思わずススーリは少女を抱き上げ、自身のスーツが汚れることも構わず、強く抱きしめると息の浅い少女が雨に濡れないよう身を寄せ、家へと急いだ。



少女が目を覚ました時、目に映ったのは暖かな色をした毛布だった。あれだけ気持ちの悪い雨にまわりつかれていた体はある程度拭かれていて、多少の違和感を感じる程度に軽減されていた。

だが、そんな事よりも少女は自身のいる場所がああ暗い道の端でないことに心底恐怖した。

あそこではない、けれど人の住んでいるであろう空間、そこに自身が居るという事実が体を震えさせる。

「あつ……あ、あ」

思わず毛布から這いだした少女は力なく両足で立ち上がると、うろうろと部屋の出口を探す。それほど大きくない部屋のようですぐにドアは見つかった。よろよろとその扉まで寄るとそのやせ細った腕を伸ばす。

だが、伸ばすその直前で、ドアがゆっくりと開かれてしまう。

「あら、起きたのね。具合はどう？一応お医者様に見てもらったんだけど……」  
「ひっ……！」

「あ、こら待ちなさい！」

突然開かれたドア、その前に佇みあまつさえ自身に話しかけてきたスズーリに少女は一歩後ずさり、そして混乱したままドアの向こうへ逃げようとする。

だが、疲れ果てているであろう少女の速さなどスズーリにはなんの問題にもならない。その触れれば折れそうな腕を優しく掴む。

けっして力を入れないように細心の注意を払い、腕を捕まえるとそのまま全身で包み込むように少女を抱いた。

「あつ、あう……いい、いや……！」

「いやじゃないでしょう？とにかくまずはお風呂に入りましょう。最低限拭いてあげたけど、そのままじゃ気持ち悪いでしょ？」

少女を抱きしめたスズーリはそのまま少女を抱き上げて風呂場へと向かう。少女は



先ほどから何とかススーリの腕から逃れようともがくが、か弱い少女の力では希種であるススーリを振りほどくことなど到底できない。

「暴れないの。ほらほら、落ち着きなさい」

ススーリがそういうと抱きかかえられた少女の目の前に何やらぴこぴこ動くものが現れた。それは少女をあやすように動いている。

しばらくして少女はその動いているものが「耳」であることに気が付いた。大きく広がった人ならざる耳の存在に、少女は思わずススーリを見上げる。

「ん？どうかした？」

確かに耳はススーリのものであり、そしてその瞳は羊のように横に開かれている。

いや、羊のようにでは無く、紛れもなくそれは羊のものであった。

大きく太い巻角が生え、くせつ毛な髪は足元に届かんばかりに長く、それでいて美しいものだった。

「あつあつ！ああう……！」

自身の汚れた体を抱きしめているのがあの、希種であると気づいた少女はさらに暴れ出す。こんな汚れた体に触れさせてはいけない。この人は自身が触れていい人ではない。

そんな少女の考えを知ってか知らずか、ススーリは暴れる少女をよりいつそう抱きし

め、決して落とさないように注意しながら風呂場へと進んでいく。



「あら、可愛いお顔ね。汚れていて分からなかったわ」

「あう……」

脱衣所に連れてこられた少女はスズリに無理やり汚れた衣服を引つべがされると同時に裸になったスズリに引つ張られる形で風呂場に連れてこられる。

そこは風呂場というにはあまりにも広く、まるで銭湯や旅館のようであった。そんな場所に行った経験のない少女には、そんな例えを思うことも出来なかったが、それでもこの広さが尋常ではないことくらいは何となく理解できた。

そのままシャワーの前に座らされ、頭から体全体までくまなく隅々までスズリに洗われた少女は湯船でたつぷりと体を温めた後、お風呂から上がり、ベッドの上に座っていた。

正確には、ベッドの上に座るスズリの膝の上、なのだが。

「あ、の……」

「ん？」

ススーリは雨に濡れ汚れていた時とは様変わりした少女を優しく労わりながらその頭を丁寧な撫でてゐる。

「あなた……は？」

「私？　そういえば自己紹介してなかったわね。うっかりしてたわ」

ススーリは優しく微笑み、首をかしげる少女の頬に触れる。予想していたより肌は綺麗で幼子特有のもちもちとした感触が伝わってくる。

「私はススーリ。この家に住んでるの。あなたのお名前は？」

「……ない」

「そう……帰る場所はあるの？」

「……」

俯く小女にススーリは何も言わず、もう一度その頭に優しく手を置き、丁寧に撫でてやる。

「なら、この家に居なさい」

「……ええ」

「ふふつ、そうと決まればまずはあなたの名前よね、無いと不便だし……そうねえ、あなたの名前は——」



「ススーリさん、最近凄いスね。前も凄かったっすけど、ここ最近はもつと凄くなっただけですか」

「あら、ありがとう。でも、まだまだ頑張らないとね。私も、貴方も」

「は、はいっ!!」

会社の中では部下や同僚から頼られる存在として、上司からは信頼できる有能な部下としてかなり評価されているススーリだが、その評価はここ数日でこれまで以上の伸びを見せている。

希種の能力は常人の3倍が限度と言われている中、最近のススーリの働きは少なくともそれ以上であることに疑いようはない。

それこそまるで何かに覚醒したかのようなススーリの姿に同族の希種は何かあったのかと聞き出そうと躍起になるが、ススーリの口から彼らの望む言葉が出ることは無い。

いや、ススーリとしては何も隠しているつもりも無く、というか隠すも何も、古くから希種に伝わる言葉を繰り返し口にしていただけなのだが。

それはつまり

”人との絆を大切にせよ”

仕事を終えたススーリは明日の予定を確認しながら家路に急ぐ。

家など人が一人住めば良い程度にしか考えていなかったススーリは他の希種が豪華な一軒家に住まうのに対し、変哲もないただのマンションに住んでいる。

そこも希種専用の豪華でかなりセキユリテイーの厳重なマンションなのだが、ススーリのような上位の希種が住むには不釣り合いな物件であることは間違いない。

「ただいま。帰ったわよ」

ススーリが家の扉を開け、部屋の奥へと声をかけると、とたとたという足音が響き、その足音の主はススーリへと勢いよく抱き着いた。

「おかえりなさいっ！ススーリさまー！」

「ふふっ、ただいまシエイパ。お留守番ありがとうね」

「いえ！ススーリさまの為ならなんともありません！それにススーリさまのお母さまも居られましたから！」

「もう……お母さんまた来たのね……シエイパの顔が見たいからつてしよつちゆうやつてくるようになって……」

「ススーリさま？」

「ああ、なんでもないわシエイパ。それより今日も作ってくれたの？」

「はいっ！ススーリさまのお母さまに教えてもらったススーリさまの好きなシチューを作ってみました！」

「ふふっ、それはたのしみね。……食事もいいけど、その前にシエイパ、口調」

「あ、えと、すすーりさま？」

「シエイパ？」

「……すすーりい」

「いいわ。いらっしやいシエイパ」

「……っ」

屈んでシエイパと視線を合わせたススーリは両手を広げシエイパを誘う。シエイパは逡巡した後、その胸に飛び込んだ。

「ねえ、すすーり」

「なにシエイパ？」

「どうしてあの日、私を拾ってくれたの？……希種じゃない、ただの人の私を……」

「……そうねえ……放っておけなかったから、とか一人で生活するのは寂しかったとかいろいろあるけど……」

「デキる女性として周囲に認識されているススーリはシエイパの前だけに見せる飛び切りの笑顔を向けて、シエイパの耳元で優しくささやいた。

「あなたに、一目ぼれしちゃったみたい」

そんな一言だけで首筋まで真っ赤になるシエイパに愛らしさを感じながら、ススーリはシエイパを抱きしめ、その暖かさと絆を心の底から実感するのだった。

## 不良少女×竜社長

「社長、少しお休みください」

この時代、誰でも一度は聞いたことのある大企業、その天にも届かんばかりに巨大なビルの最上階の社長室で、大量の紙束を処理しながらパソコンを操っているのは希種の女性だ。

深紅の双角を持ち、炎のような赤髪を揺らし、太くて長い尻尾をゆらゆら振るその姿は、まさに偉大なる竜の希種に他ならない。

希種の中でも頭一つ抜けた能力の高さを持ち、空を飛ぶことすら可能な竜の希種であるならば、数日不眠不休で仕事をしたとしても全く問題が無い。

仕事のパフォーマンスが一切落ちることなく、只の人では到底成し得ない仕事量を効率よく処理することも可能なのだ。

とはいえ、それにも限度というものがある。

「……羊クン、まだ仕事は残っていると思うのだが？」

「あれは来月のものです。既に今月分のもの完了しております。重要な問題が発生しなければ社長にして頂かないといけない案件はございません。……それと私は羊では



無く、秘書の歌守です」

「二十歳を過ぎたとはいえ、まだまだ若い者には負けんよ、歌守クン」

「社長に勝てる者など居りません。一週間一睡もせず作業をし続けるような者は希種でもいませんから。とにかく、お休みください」

秘書の言葉に社長は洩々机の上を片づける。彼女がこの社長室で処理しなければいけない案件はとうに終えており、本来ならば出社する必要すらないのだが、それでもこうしてやってきては今やらなくてもよい仕事を早々に終わらせようとする姿に、秘書は深くため息を吐く。

疲れを吐き出すかのようなため息を聞いた社長は顎に手を当て、秘書を観察する。

「…………ふむ？　そういうえば歌守クン、君、休んでいるのかい？」

「おかげさまで十分に休ませて頂いております。私は社長の秘書ですので」

その言葉はつまり、社長と同じようにここ数日ともに休んでいないということだ。

「私よりも自分の体を心配するべきなのではないかな？」

「ご心配頂きありがとうございます。ですが心配いりません。睡眠も栄養も、その他諸々すべて満たされておりますので」

「ふむ…………その他…………」

「な、なんですか…………」

竜の希種たる社長は一代でこの会社を大企業にまで成長させた希種だ。社会や人の流れを読むことなど容易く、目の前にいる羊の希種の変化を察する程度難しくない。

秘書を務めているこの羊の希種は先日までこの企業に勤める希種の一人にすぎなかった。それが少し前から他の希種を抜き去るほどの好成績を収め、その能力はさらに伸び続けている。だからこそ彼女を秘書に抜擢したのだ。

……何かがあったのは確実。そして希種の特性から彼女にどのような変化が起こったのかそれを理解するのに社長ならばほんの数秒で事足りた。

「なるほど歌守くん、君は”絆”を得たのだな！」

「な、な!？」

「いきなり君の成績が伸びたところで、そうではないかと思っていたが、その動揺具合はどうやら凶星のようだな！」

「……………はあ、このようなところで頭を働かせなくとも良いでしょうに！」

「はっはっは!ではやはりそうなのだな!君のパートナーは一体どんな人なのだ?男か?女か?年上?いや年下だな!」

「プライバシーの侵害ですよ社長!」

「なるほどなるほど女性で、年下なのか……………!君の能力の伸びからして君から一方的に絆を結んでいるわけではない。両想いか!」

「何も言っていないのに当てないで下さい!」

はっはっは、と社長は高笑いをして、動揺して今まで見たことのない顔をしている羊の秘書を宥める。

「はっはっはー!別に恥ずかしがることではあるまい!希種に生まれたからには絆を結ぶパートナーは必要な存在であるからな!とはいえ、この会社でも恐らく絆を結んでいるのは君くらいのもだろうな、他の希種の成績を見る限り」

「……そうおっしゃられる社長はどうなのです。我々希種は確かにその能力は只人の数倍を誇りますが、それは二十歳をピークに徐々に低下傾向にあるのはご存知でしょう? 五十を過ぎればその能力の低下は最低となり、同年代の只人よりも劣るのはご存知のはず」

「んーそれは分かってはいるんだが……こればっかりは出会いの場があつたとしてもな。希種の中でも竜というのは人外の部分が多く、恐れられる。恐怖や畏怖、あるいは希種であること、只人であることよって起こる格差や嫉妬というものは、絆を結ぶ際

に大きな障害になる……それらを乗り越えた君たちが羨ましいよ」

「……今度、社長にも紹介させて頂いても?」

「ああ!歓迎するよ!わが社の優秀な秘書のパートナーだからね」



「ふむ……休みと言つても、何もすることが無いな……」

大企業の女社長、その名をリングル・ドラン。

リングルは秘書に休めと言われ、渋々自宅に帰つたはいいが、仕事以外をやる気にもならない為自宅でする作業をしていたのだが、そのリモート作業さえ秘書に見つかつてしまいリモート状態でしこたま怒られてしまつた。

逃げるように自宅から脱出するという醜態をさらす竜の希種はそのまま夜の街をさまよつていた。

本来ならばたった一人でこのような場所を歩いていい身分ではないが、夜の街の賑わいは彼女を珍しい種族の希種程度に認識し、誰もリングルをかの大企業の社長だとは気づかない。

「この辺りの騒がしきは悪くない……面倒な客引きさえ無ければ、だが」

社長であると分からずとも、竜という珍しい希種であることが、そのテの客引きを引き寄せる。煩わしそうにそれらを見無視しながら、どこか飲める店でもあるかと煌びやかなネオンの看板を見渡すリングル。

そんな彼女の目に、小さな人影が映つた。

水商売の男女が露出度の高い”制服”に身を包んで妖艶な雰囲気を纏うなか、その影は同じく制服を身に着けていた。

だが、その制服というのはどう見ても学生のものだ。

「ふむ……」

しばらく考え込み、リングルは記憶の奥底から会社の社員リスト見つけ出し、そこに記されていた写真付きの家族構成をざっと思い出す。

「ああ、確かあそこの学校か」

そして記憶から見つけ出した社員の子どもが、目の前の人影が着ている制服と同じものだと理解し、目の前の人影が真正銘の学生である事を把握した。

ゆつくりとした足取りでその人影に近づくとリングルを、例の人影もどうやら認識したようだ。

「あ？何？ワタシになんか用？」

いやに口の悪い少女だ。リングルの第一印象はそんなものだった。髪を金に染め、目つきは悪く、耳につけたピアスの趣味は悪い。

「いや？こんなところで何をしているのかと思つてね。進学校の学生さんが」

「チツ、あんたには関係ないだろうが」

「そうかもしれないな。だがまあ、大体見当は付くさ。ここでそうやって突っ立っている

ヤツはどういうヤツなのかはね」

リングルはわざとらしく少女の体を足先から頭の先までなめまわすようにじっくりと観察する。その視線を察した少女は多少引きつった笑みを作り、けれど余裕を崩さぬよう注意しながら言葉を口にする。

「は、なんだ。あんた客かよ。けど悪いなワタシはソツチの趣味はねーんだよ」

夜の街、それも風俗関係の店が集まるこの場所で一人でいる少女が一体どのような理由で居るのかなど、リングルでなくとも考えるまでもない。

「ほう……ではこれではどうかな?」

余裕をもって話しているつもりだが、傍から見ればがちがちに緊張している少女にリングルは5枚の紙幣を握らせる。

「なっ!? あ、アンタ……」

「ほうほう、まだ足りないのかね? ここの相場は分らんが、ならこれでどうかな?」  
そういうとリングルは懐からさらに20枚の紙幣を取り出し、少女の手のひらに乗せする。

「へ……へっ! 上等じゃねーか! 良いぜ! 売ってやるよ、ワタシの体」

「そうかい、それは良かった」

人のよさそうな笑みを浮かべたリングルは少女の肩を抱き、家路についた。



「で、でつけえ家……」

「一応会社の社長をしているのでね、このくらいのモノでないとししがつかない……と昔言われてな。私としてはもつと小さくてもいいのだがね」

巨大な門を通り、これまた巨大な扉を開き家の中へと入ってゆく二人。

「そういうえば、君は何という名前なのかな？」

「……んなもん、必要ねーだろ」

「いやいや、やはり名前を知っていないと不便だろう？いつまでも君ではやっている最中盛り上がれないだろう？」

「チツ……サクだよ。緋色サク」

「そうかい。ではサク、もうそろそろ行こうか」

家にサクを招き入れたリングルは少々の世間話の後、ようやくサクを寝室へと誘った。

「さて、それでは脱いでくれるかな？」

「チツ、分かったよ……」

ベッドの上でにこやかに、だが命令するかのよう<sup>に</sup>リングルが言う<sup>と</sup>サクはためらいながらも着ていた制服を脱いでいく。

上着を取り、スカート<sup>を</sup>脱いだサク。

「(こちらにおいで)」

「……」

下着姿のままのサクはリングルの言葉に小さく震えながらも従う。その足取りはおぼつかず、そのまま崩れ落ちそうなほどに弱弱しかった。

「きゃー！」

リングルの腕の前までやってきた裸同然のサクはその大きな両腕に抱きかかえられ、そのまま抱き枕よろしくベッドに横にされる。

「んじゃ、おやすみ」

そう言ってリングルはサクを抱きかかえたまま目を閉じてしまう。

「は!?! ちよ、お前! やるんじゃねーのかよ!!」

「体売ったことも無い少女をやるほど鬼畜じゃないのよ私は」

「な!?!」

「あそこの相場より低い値段で驚いて、慣れない言葉を震える口で言<sup>って</sup>、涙目にな<sup>って</sup>るような子が売<sup>り</sup>なんてや<sup>つ</sup>てる訳ないでしょ<sup>ー</sup>が。それにあ<sup>そ</sup>こで売<sup>春</sup>行為<sup>な</sup>んて



したら店に睨まれるぞ。良かったな最初に見つけたのが私で」

「な、な、な……」

混乱しながらも状況をある程度理解したサク。自身のしていたことがどれだけ危険で、どれほど無謀だったのか、それを知って体の震えはよりいっそう大きくなる。

「なーんであんなとこであんな事してたの？」

「……」

「別にしゃべらなくてもいいけどね？　一応私は君を買ったわけでした」

「……」

「なら当ててあげようか？　学校での成績が振るわない？……違うみたいね。なら、両親との仲が悪い……なるほど。母親？　父親？……ほうほう、じゃあ……虐待？」

「！」

「ははは、わかりやすいねサクは。なるほどつまりサクは母親の連れ子なわけだ。そして父親となる男に虐待を受けていた。それがエスカレートして、性的なものに発展し始めていた。母親は父親のご機嫌をとるために君を放置していた」

「……人の事勝手にべらべらしゃべって、希種ってのは皆アンタみたいに性格悪い奴らばっかなのか」

「まさか！　これは職業病というか、竜の希種特有の先読みのようなものさ」

「ふんっ。……………アンタの言った通りよ。アイツは私を子どもと見てない。……………ただのサンドバックだつてさ！笑えるよね！今日は気持ち良くなれるサンドバックに変わってた！だから、だからワタシはワタシの体を売ってやろうって思ったのよ！あんなクソみたいな男にくれてやるくらいなら、自分の意思で捨ててやろうって！」

「そう……………」

「馬鹿みたいだよね！私も！あの母親も！あの男も！！全部ぜんぶ！」

「ふうん……………」

「ちよつと、アンタ……………」

「リングル」

「え？」

「私のことはリングルと呼びなさい。それと、吐き出し終えたならもう寝なさい……………私も寝たいから」

「な、なによそれ!?勝手に人の事暴いといて！勝手に寝るなんて！」

リングルは震えるサクの手をぎゅつと握り、彼女の困惑を写す瞳を覗き込む。

「いいかしら？現状を変えたいならそんな自暴自棄なやり方じゃあ非効率なの。もつとしっかり考えて、そして自分で答えを出すしかないの。どうやっても私は他人で、貴方の行く道を決定付けるのは私ではなく貴方自身なの」

「そんな……そんな勝手な……」

「……今日はもう寝なさい。明日の事は明日考えればいい。今夜はゆっくりと、何も考えずに眠るといいわ」

まだ不満を露わにするサクだったが、リングルが優しくその頭を撫で、体を抱き寄せると、肌と肌が触れ合う暖かさがゆつくりとサクを眠りへと誘い、そしてしばらくすると小さく可愛い寝息がリングルの胸元から聞こえてくるのだった。

「……ふむ、私には子守りなど真似事でもできそうにないな……む？」

サクを慰める言葉など知らないリングルは結局彼女自身に行く先を決めるように言うしかなかった。これが仕事ならば一瞬の内に解決法を描けるというのに、そう小さく息を吐くリングルは、サクより何やら暖かな何かを感じた。

「……単純だな。この子も、私も」

母親も、父親も、誰も信頼できるものがない絶望の中、唯一サクが縋りつくことのできた竜の希種。

これはそんなサクの勘違いによるものなのかもしれない。

それでも、もし朝が来てサクがこの家に居たいと言うのなら、リングルはそれを了承するだろう。

彼女から感じるリングルへの確かな“絆”の暖かさに誓って。



## （捨て子幼女十不良少女） 十女店長×鹿店員

希種と呼ばれる種族が人と共に歩み始めて数十年が経った現在。

希種はその有能さから瞬く間に現代社会に入り込み、なくてはならない存在となった。

だが、だからと言って穏やかに受け入れられた訳では無い。希種に対する差別、あるいは超えることのできない能力の差からくる区別、それらが社会問題となっていた時期があった。

住む場所は明確に分けられ、利用できる飲食店も誰が決めたわけでも無いのに、分けられていった。

希種お断り。只人お断り。そんな看板が店の前にぶら下がっているのが普通な時期が、確かに存在していたのだ。

しかしそんな時勢の中で希種、只人両方を歓迎するという稀有な店が存在していた。

「ね、ねえサクお姉ちゃん……本当にココなの……？」

「……あく一応あのクソドラゴンからもらった地図によればここのはずなんだが……シエイパはなんかスーリさんから聞いてるか？」

「ううん……」

「そうかあ……」

黒く艶やかな髪を白い紐で結び、おさげにしているシェイパはどこかおどおどとした様子でサクの腕を心細そうに掴んでいる。

二人のいる地区は数多くの飲食店が並ぶ一角で、巨大で煌びやかな店が立ち並んでいる。その中でシェイパとサクとはある一軒の店の前で訝し気にその入り口を見つめていた。

「ガキ二人にどんなトコ紹介してんだよあのクソドラゴン……」

二人の目の前にある店は何とも年季の入った喫茶店という風であった。ドアにはステンドグラスがはめ込まれ、店の前のガラスケースにはホコリがつもった食品サンプルが乱雑に置かれている。

極めつけに、店先に置かれた手書きのメニュー表が何とも言えない味わい深さを放っている。

「タイムスリップしたみたい……」

「時代に取り残された遺物じゃねーか。とにかく入ってみるか？あのクソドラゴンもこんなタチ悪い嘘なんかつかねーだろうし」

なぜ二人が入るのをためらうほどの老舗感を出している喫茶店の前に居るかという

と、始まりは数日前にさかのぼる。



「あ、あの……初めまして、歌守シエイパ……です」

「お、おう……緋色サクだ」

二人の初対面は社長室でのことだった。ススーリの提案を社長であるリングルが了承する形で実現した今回の対面は現在この企業で絆を結んでいる希種とそのパートナーたちとの交流の場として設けられたのだが、実際に絆を結んでいるのは二組のみ。

つまり社長であるリングルと緋色サク、秘書のススーリとシエイパだけが、この場に集められたのだ。

シエイパはそばに立つススーリの足元に隠れ、恐る恐る目の前にいるサクをじつと見ていた。

サクの方もどこか所在なさげに視線をさまよわせ、クソドラゴンこと、絆相手であるリングルがにやにやと意地悪そうな顔をしていることに気が付くと、不快感を隠そうともせず睨み付ける。

「おやおや、シエイパ君を怖がらせるとは、お姉ちゃん」としてあるまじき行為ではな

いかな？」

「だまれクソドラゴン」

サクの睨みはリングルには全く効果が無く、むしろススーリの足元に隠れているシエイパにより一層の警戒心を抱かせるだけだった。

「あく……なんつーか、まあなんだ、すまねーな。怖がらせるつもりはなかったんだよ」  
申し訳なさそうに頭をかくサクの様子に、シエイパは恐る恐るサクの前に出てくる。

「わたしこそ、ごめんなさい……ススーリ様以外の希種の方と……パートナーの方にお会いするのは初めてでしたので、少し緊張してしまつて」

「ほお……！ まだ幼いだろうになかなか礼儀正しいね、君の教育の賜物かなススーリ君」

「この子の努力によるものですよ。私は特には……シエイパ、この方達の前では様付けは……」

「ご、ごめんなさい……」

「ククク、サクも見習つたらどうかかな？」

「あつちの……ええと、ススーリさんみたいに尊敬できる希種としての姿を見せるんならな」

その後も四人はいくらかの会話を交わし、その結果シエイパはサクのことをお姉ちゃ



んと呼び、慕うほどに仲良くなっていた。

サクもシエイパを本当の妹のように思っており、シエイパがその歳にしてはかなり聡明で、勉強熱心な子であると知れると、サクは腐つても進学校にいられる程度には勉強ができるため、いつの間にか交流の場は二人の勉強会へと姿を変えていた。

その姿にちよつとした嫉妬を覚えたススーリが家に帰った後、シエイパにいつも以上の念入りな髪の手入れを頼んだりしたのだが、それは別の話。

結局サクとシエイパが本格的な勉強会に突入する前に今回の交流はおひらきとなった。

その後も二人は電話越しではあるが何度も言葉を交わし、親交を深めていった。

そんな時、サクのスマホに思い詰めた様子の声音でシエイパが連絡をしてきたのだ。その暗い雰囲気を感じ取ったサクは実際に会って話をした方が良いと考え、そのことをパートナーであるリングルに相談した。

事情を聴いたリングルがちようどいい場所があるとサクに教えた喫茶店が、先ほどの老舗だったという訳だ。

サクとシエイパは一見さんお断りな雰囲気醸し出す扉をゆつくりと開け、中の様子を確認する。

喫茶店の中は予想通りアンティークものの飾りがおしゃれに彩り、コーヒー豆の煎る香ばしい匂いが鼻をくすぐる。

いくらかお客が入っており、誰もがこの穏やかな空間をゆっくり楽しんでいるようであった。

「いらつしやいませ、お二人ですか？」

「え、えと……」

「ああ、二人。禁煙席ある？」

「はいはいどうぞこちらに」

店の奥から現れたのは白と黒の標準的なメイド服に身を包んだ店員だった。のびやかでゆつたりとしたしゃべり方が印象的なその店員の頭からは鹿のものと思われる大きな角が伸びていた。

それを見て二人は驚く。鹿の希種だ。

彼女の片側の角は半ばほどでなぜか折られており、もう片側の角には可愛いリボンによつて鈴が結びつけられていた。

それによつて彼女が店の中を歩くと、リンリンと可愛い音が鳴る。静かな店内ではその音はより強く響くが、客はそれを気にする様子もない。

むしろこの店ではその風景が当たり前であるかのように、誰も気に留める様子はない。

かった。

鹿の店員に案内されるまま、二人は店の真ん中のカウンター席に通される。

「いらつしやいお嬢ちゃん達」

カウンターの向こうにいたのは美しい女性だった。艶のある声に、赤い口紅がよく似合っている。まさに大人の女性と言っている雰囲気を持っていた。

若い、とは言えない。だがその声はしっかりとした芯のあるもので、良い年の取り方をした女性と言えはいいのだろうか。

「お嬢ちゃん……？」

「なに、私から見れば二人ともお嬢ちゃんさ。二人ともココアでいいかい？」

「は、はい……」

シエイパがその雰囲気呑まれて空返事をするとその女性は何やらカウンターの下で作業を始める。

何とも慣れた手つきで作業を進める女性だが、ある違和感にサクは気づいた。先ほどから女性は自身の手元をほぼ見ていないのだ。

にもかかわらず、その流れるような作業は一切のミスが無く、滞りなく進んでいく。

「ちよいと昔に目を悪くしてね、お嬢ちゃん二人の顔もよく見えないのさ、まあこの仕事は体に染みついてるから問題ないんだけどね」

「あ、あの……ごめんなさい」

「ふふ、きにすることは無いさ、ほら出来たよ。ごゆっくり」

「……ありがとうございます」

二人の前に大きなマグカップを置くと女性は店の奥へと引つ込んでしまった。

二人が受け取ったココアは上に白いクリームと生チョコレートが添えられている。一口飲むとその濃厚さに驚くが、その後には滑らかなクリームがその濃さを滑らかなものにしてくれる。

一口飲んだ後、もう一口飲みたくなるような美味しさだ。

「……で、シエイパ、相談事ってなんだよ?」

「うん、あのね、お姉ちゃん」

そこでようやくサクは本題に入ることにした。何とも言いずらそうにしているシエイパだが、サクは焦らせるようなことはしない。

「……んな言いにくい事なのか?」

「ええ、と……実は、ね、ススーリ様の事で……」

「ススーリさん? なんだ、喧嘩でもしたのか?」

「! そんな事絶対ありません! ススーリ様は私の命の恩人なんです! それだけじゃなく、勉強までさせて頂いて……喧嘩なんて……!」

「わかった分かった！ バカな事聞いた！ だからちよつと落ち着け、な？」

思わず立ち上がり、声を荒げるシェイパを宥めながら、サクは本題を聞き出す。小さな口でちよびちよびとココアを口にするシェイパはようやく悩みを打ち上げる。

「……サクお姉ちゃんは……リングルさんに、どのようなことをされているのですか？」

「あん？ どのようなことって？」

「？」

そこからなかなか話が進まないシェイパに首を傾げながらサクは甘いココアに口を付ける。

「サクお姉ちゃんは、リングルさんどのように絆を確かめ合っているのですか！」

「！つごほつごほつ」

思い切つて口にされたシェイパの問いに思わずサクはむせる。

まさかそのような言葉がシェイパの口から飛び出すとは思っていなかったのだ。

希種はパートナーである只人との深い接触により、その能力を維持、向上させる。

深い接触とは主に肌と肌とのふれあいと、心の交流を意味し、それを総じて”絆を確かめる”行為と呼んでいるのだ。

「ど、どごうって……」

「私、このままでいいのか不安なんです……私は、ススリー様にいろんなものを頂きました。でも、まだ私は何もススリー様にお返しできていません」

「……お前がパートナーになっただけで十分返せてると思うけど?」

「それだけしか、返せてないんです……だから、もつとススリー様に恩返しするにはどうすればいいのか考えたんです……図書館の本で読みました。希種の方は、絆を確かめる”ことが癒しになる”って、それでサクお姉ちゃんに、お姉ちゃんのところはどんな絆の確かめ方をしているのか参考にさせて頂こうかと……」

「いや……でもなあ……」

シエイパの言葉は最初から最後まで真剣なものだった。自身の絆相手である希種に對する深い親愛が見て取れる。

その姿にサクは協力してやりたい気持ちを抱いていた。

「さすがに……恥ずかしい……」

だが、それとこれとは話が別だ。

サクの絆相手である竜の希種、リングル・ドランはワーカホリックで、樂天的で、何を考えているのかで分らないような存在だ。

確かにサクを大事にしてはいるが、過度に干渉はしないし、束縛するようなことも無い。

わずらわしきは無いいし、住む場所もリングルの大きな家に住まわせもらっている。

小遣いとしてドン引きするような金額を毎月渡されてもいる。

何とも快適で、これ以上ない環境と言えた。

だが、その代わりとして寝るときは全裸派なリングルの抱き枕として一緒にベッドで寝させられている。さらには肌の接触が無いと”絆を確かめる”ことができないと言つて、サクまで裸に剥かれる始末。

サク成分が不足している、などと言つて不意に胸元に手を滑らせようとしたときはそのみぞおちに頭突きを喰らわせてやったほどだ。もちろんリングルには何のダメージにもならなかったが。

(だめだ……思い出しただけで顔から火が出そうだ……)

目の前の純粋な瞳でこちらを見るシェイパに、そんな話をしていいものか……。サクは頭を抱える。

「サクお姉ちゃん……?」

「あー、つと……一緒に……寝る……とかかな……」

あらぬ方向を向きながらとりあえずそれだけ応える。嘘は言っていない。

「! 一緒に、ですか」

「おお……」

「そ、それはどんな感じで」

「どんな感じで!？」

だがシェイパは予想以上に食いついた。身を乗り出し、興味深々といった具合でサクに続きを促す。

「だ、だから……一緒のベッドでだな……抱き合って……」

「抱き合うんですか!？」

「しゃーねーだろ!その方が肌が触れて良いってあのクソドラゴンが言うんだよ!」

「肌が……?でも、寝るときは寝巻で……あつ」

「あ」

あえてサクが言っていないなかった真実までたどり着いたシェイパはほのかに顔を桜色に染め、それ以上は何も言わなかった。

あつ(察し)というやつだ。

「……そ、そういうシェイパはどうなんだ、ススーリさんと、どーヤツてるんだ」

「わ、私は……いつも髪の毛を梳かして差し上げてます……」

「へえ、髪を」

「ススーリさま、くせつ毛のお手入れが大変だとおっしゃって、私がいつもお手伝いしているんです」



それからシェイパはどのように、どれほど丁寧にススーリの髪を梳くのかを丁寧に説明していく。

(アイツ髪は……それはど気にしてなさそうだったな……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：をしてみると、見たことあんな……)

サクはそんな楽しそうに絆相手の事を語るシェイパに相槌を打ちながらそんなことを考えていた。口ではクソドラゴンと言っても、内心では感謝しているサクは、たまにはこちらからなんかやってやるかといつもなら考えないようなことを考えていた。

改めてシェイパの様子を見ると、彼女はまだ絆相手の事を話し続けている。先ほどわざとでは無いとはいえ、恥ずかしい質問攻めにされた仕返しの一つでもしてやろうかと、サクに悪戯心が芽生える。

「じゃあシェイパ、お前もススーリさんにやってやればいいじゃん」

「へ？ 何をですか」

「一緒に寝る」

「……え、えええ!?!」

サクは一緒に寝る、としか言っていないが先ほど察したシェイパの頭の中でその一言は全裸でススーリとベッドの上で絡み合うイメージのものへと変換される。

「それか髪梳いてやってんだろ？ ススーリさんの長い髪に埋もれながら。それじゃあ

裸で髪に埋もれながら梳いてやるとかさ」

「お、お姉ちゃん!!」

「くくっ」

悪戯が成功したことにサクは上機嫌。対してシェイパはからかわれていたことに気が付き、頬を膨らませ抗議する。

そんな時、二人は後ろから声をかけられる。

「お、お客様」

それは先ほどの鹿の希種である女性だった。顔をほのかに赤く染め、何やらもじもじとしながら、居心地悪そうにしている。

「そ、そのようなお話は、どうかもう少し小声で、お願いします……」

そこでようやく二人は店内で非常に目立っていることに気が付いた。何やら他のお客がこちらをちらちらと見ている視線にいたたまれなくなった二人は、それからしばらくして逃げるように店を後にした。

余談だが、喫茶店での代金はリングルが支払い済みだった。

「あの二人、帰ったのかい」

「はい、千代」

「そうかい。次来たときは奥の部屋に通してやるかね、あんな濃い話は他の客には毒さね」

「で、ですネ……」

千代と呼ばれた女店主は鹿の希種へとそうつぶやく。

この店のかつて希種と只人が区別されていた時代よりずっと前から両種族が分け隔てなく交流できる場所として千代が作った店だ。

当時より希種の絆について知識のあった千代によって両種が自然と距離を縮めることのできるように配慮したその店は何組もの絆のカップルを生み出した。

今では希種と希種に苦手意識を持たない只人との出会いの場として機能し、それだけでなく最近絆となったカップルがとりあえず初デートの場所として選ぶ店として、”絆”というものをよく理解している希種の間では有名な店だった。

サクとシェイパが訪れた時間も、そのような初々しい希種と只人のカップルが数組居た。

そのカップルは只人の少女が二人でこの店に入ってきたことに少し首を傾げ、興味を抱いた。

その好奇心に突き動かされるまま、悪いと思いつつ聞き耳を立てていた彼ら、彼女らの耳に、何ともディーブな話題が飛び込んできた。

希種にとつて”絆の確かめ合い”とは両者の間だけで行われる非常にデリケートなものだ。ススーリが髪の手入れをするように、リングルがサクを抱きしめ寝るように、希種の種族や個人の性癖ともいえるものによってそのやり方は千差万別であり、そしてかなり個人的な感情が入り乱れる為、周知させるようなものでもない。

あくまで希種とそのパートナーの間だけの秘されるべき内容なのだ。

ぶつちやけ言ってしまうえば希種の”絆の確かめ方”とは只人にとつての”夜の営みの仕方”とほぼニュアンスが同じなのだ。

見た目まだまだ幼いはずの二人の少女が、聞き耳を立てているこちらが恥ずかしくなってくるような濃厚な話を延々と繰り返すなんて予想だにできなかったのだ。

結局他のお客がびくびくと体を震わせ、顔を真っ赤にし始めたあたりで鹿の希種である彼女が止めに入ったわけだ。

「わたしも若い頃はあんなかんじだったのかねえ」

「千代はまだ若いよ?」

「ハイナに比べりゃもういい歳さ……なあハイナ、お前さん新しいパートナーは決めたのかい?」

「またその話？ 私の相手は千代しかないよ」

「ハイナがそう言ってくれるのは嬉しいけどねえ……いつまでも贖罪のつもりで——」

「そんなつもりじゃない！ そりゃ前まではそうだったけど！ 今は千代の事、本気で愛してるの!!」

「お、おま……まだお客が……!」

「千代がおかしなこと言うからでしょ!! もう二度と言わないって約束してくれるまでずっと言ってるんだから!! 愛してる！ 愛してる——!」

「こ、この小娘！ わかった！ 分かったからそのこっぴどく叫びを辞めとくれ!」